

# 魔王バトルロイヤル

Maou Battle Royal

Presented by KOREYUKI Illustration by ROUKA

魔力ゼロでも  
最強魔王に  
なれますか？

特別試読版

魔王さま、  
メイド服、着エロとは、  
どんな意味でしょうか…？

之雪  
KOREYUKI

イラスト  
ろうか  
Illust. ROUKA

普通の高校生が、ある日突然異世界魔王！  
美少女魔族と始める夢のハーレム生活！

第10回GA文庫大賞  
奨励賞  
受賞作

なんの変哲へんてつもない、とある日の朝。

自宅を出た春野健史はるのたけしは、空を見上げた。

空には雲一つなく青く澄み渡り、暑くもなく寒くもなく、  
気持ちのいい天気だった。

なんだか今日はいい事ありそう、などと柄にもなく考  
えてしまう。

「……そんなわけないのにな。どっせ、いつもと同じつ  
まんない一日が……ん？」

そこでなにかが通りの向こうから走ってくるのに気づき、  
健史は首をかしげた。

黒い、煙というか、闇やみをまとったようなそれは、巨大な  
騎馬だった。

その背には重厚な鎧よろいを着た騎士がまたがり、手綱を握っている。

ドドドド、と地響きを立てながら騎馬が猛然と駆けてきて、あっと言う間に健史の眼前まで迫ってきた。

「うわあ！」

衝突する寸前、騎馬は地面を滑りながら急停止した。

騎馬が頭を下げて前のめりの姿勢になり、その背に乗った騎士が撃ち出されるようにして飛んでくる。

騎士は両腕を交差させ、×の字に構えていた。フライングクロスアタックだ。

健史はそれをまともにくらい、吹き飛ばされてしまった。「げうっ！」

全身を襲う痛みと衝撃。飛び散る火花。

なにがなんだか分からないまま、健史は意識を失った。

「う、うーん……」

どれほどの時間が経過したのか。

唐突に、健史は目覚めた。あたりを見回し、首をひねる。

「あ、あれ？　ここ、どこだ……？」

そこは薄暗い、妙な場所だった。かすかに天井てんじょうや壁が見える事から屋内であると思われるが、周囲には闇が広がっていて、部屋全体の様子はよく分からなかった。

健史は黒い床の上に横たわっていた。床には怪しげな凶形が描かれ、青白い光を放っている。

……地下にある秘密の部屋で行われる怪しい儀式。なんとなくだがそんな感じがして、健史はゾツとした。慌てて身を起こし、健史はそこから逃げ出そうとした。すると周囲の闇から浮き上がるようにして、何者かが姿を現す。

「なっ……だ、誰だ？」<sup>だれ</sup>

最初に現れたのは、銀色の長い髪をなびかせた美少女。やたらと肌の露出が激しい、ゴスロリっぽい衣装を身に着けていて、大きな胸のふくらみが目を引く。

黒を基調としたコルセットにヒラヒラしたスカートをはいているのはいいとして、上半身はノースリーブのシャツの胸元を<sup>むなもと</sup>大きくカットしたような服を着ていて、細い

布で胸の先を隠しているだけという、かなり過激な服装だ。特大のメロンか、小型のスイカぐらいありそうな胸のふくらみが、表面積の少ない布地からこぼれ出てしまいそうになっている。

続いて現れたのは、長い金髪の美少女。やはり露出が激しいボンテージ風の衣装をまとい、発育しまくった体型をしている。

胸元はシャツで覆おおわれているが胸のふくらみがくつきり浮き出ている、白い腹部はほぼ剥むき出しだ。

こちらも大きな胸をユサユサさせていて、思わず凝視してしまう。巨乳が売りのグラビアモデルですらあそこまで大きいのは見た事がない。

どちらにも美人だが、服装以外にも非常におかしな点があつた。

銀髪の少女の頭には髪飾りのような二本の角が生えており、金髪の方にも同様に二本の角がある。

そして二人ともその背後には、細長い尻尾しっぽが揺れているのが分かつた。

悪魔かなにかのコスプレだろうか。随分と凝つた衣装だが、映画か特撮番組の撮影中なのか。

戸惑う健史をジツと見つめ、銀髪の少女が口を開く。

「ようこそ、我らが城に。選ばれし魔王よ」

「は？ 魔王って……俺おれが？」

少女がコクンとうなずき、健史は首をひねつた。

そういう遊びというかイベントなのだろうか。そんなものに参加した覚えはないのだが、どうなっているのやら。すると金髪の少女が眉根まゆねを寄せ、不満そうにしげや呟いた。「本当にこんなのがうちの魔王なのかよ。なにかの間違いなんじやねえの?」

「間違いない。彼こそが我らの魔王。ちゃんと確認したわ」「マジで? なんか頼りねえなあ……魔力も全然感じねーし」ジロジロと値踏みするように見られ、健史は居心地が悪くなった。

「どういう状況なのか説明してもらおうと思い、尋ねてみる。」

「あの、俺が魔王ってどういう事? これってなにかの

イベント？」

二人の少女は顔を見合わせ、銀髪の方が答えた。

「ここはあなたがいた世界とは異なる次元に存在する世界です。俗に言う、異世界というものだと思っただければよろしいかと」

「い、異世界？ ゲームとかに出てくるあれ？ 嘘うそだろ……」

「嘘ではありません。あなたは魔王の資質を持つ選ばれし者として召喚されました。これはとても名誉な事なのですよ」

「いや、いきなりそんな事を言われても……」

健史にはなにがなんだか分からなかった。そういう設定のイベントかアトラクションに強制参加させられたと

いう事なのか。

「そもそも召喚なんかされた覚えは……鎧騎士に体当たりされたのは覚えてるけど」

「それが召喚の儀式です。鎧騎士は召喚術が形を取ったもので、私がやらせました」

「あれが？　なんであんな乱暴な真似まねを……」

「インパクトがあつてよさげではないかと」

「インパクトありすぎだろ！　もっと普通にやってくれよー！」  
「……」

健史が抗議すると、少女はムツとして黙り込んでしまった。文句を言うなんて信じられない、とでも言いたそうな顔をしている。

信じられない真似をしたのはそつちだろと思いつつ、健史は尋ねた。

「仮にここが異世界だとして、魔王ってなんだよ。それって悪役だろ？ 俺に悪の親玉をやれっていうのか？」  
「少し違います。あなたには我々の魔王になつて欲しいのです」

「我々の？ つまり、他ほかにも魔王がいるって事？」  
銀髪の少女はうなずき、淡々と語った。

「現在、この世界には複数の魔王が存在して、それぞれが真の魔王を主張し、争っています。あなたには我々の魔王となつて他の魔王を倒していただきたいのです」

「魔王になつて魔王を倒す？　魔王のバトルロイヤルやつてんのかよ……」

国の代表＝魔王、みたいな感じなのだろうか。それなら別に自分じゃなくてもよさそうなものだが。

健史が尋ねると、銀髪の少女は首を横に振った。

「誰にでも務まるものではありません。常軌を逸した強大な存在……それが魔王なのです」

「い、いや、だつたら尚更……なおさら悪いけど、俺にそんな力とかないよ？　誰かと間違えてない？」

「私の召喚術に間違いはありません。あなたは魔王の資質を持つ異世界人です」

「えー……」

そう言われても実感などなく、健史は戸惑うばかりだ。もつとも、これがなにかのイベントなら「そついつ設定」という事なのだろうが、少女達の姿や言動、部屋の造り……それらはイベントにしては本格的すぎる気がする。なにより、この場の雰囲気ただよが普通ではない。遊びや冗談では済まされない空気が漂ただよっていて、息が詰まりそうだった。

しかし、仮にこれがイベントなどではないにしてもいきなり「魔王になれ」と言われても困る。それはまた別の問題だ。

「あたしは納得できねえな。こんなのが魔王だって？ 冗談じゃねえや」

金髪の少女が呟き、健史に鋭い眼差しまなざしを向けてくる。冷や汗をかく健史を見つめ、少女はニヤリと笑った。

「魔王の資格があるのかどうか試してやるよ。それではつきりするだろ？」

「た、試すって、どっやっ……」

「簡単さ。こっやるんだよ」

「!？」

少女が右手を持ち上げ、掌を上向きに開く。

すると掌に黒い電流のようなものが発生し、バチバチと音を立てた。

息を呑みの、後ずさる健史をギロツとにらんで、少女が掌を突き出す。

「くらいな！ 黒龍雷波！」  
ドラグボルト

漆黒の雷が放たれ、竜の形となつて健史に襲い掛かる。轟音ごうおんが響き渡り、健史は腰が抜けそうになつた。避ける事もできず、暗黒の雷撃をまともに受けてしまう。

「う、うわああああああ！ ……つて、あれ？」  
かなりの衝撃を受けたと思つたのだが、痛みはなく、健史は首をひねつた。

無傷でたたずむ彼を見つめ、金髪の少女が目を丸くする。  
「う、嘘だろ。そこらの上級魔族ですら一撃で消し炭に変えちまうはずのあたしの術を受けて無傷だと……どうなつてんだ、コイツ……」

「当然。魔王に通じるはずがない」

銀髪の少女が表情一つ変えずに呟き、金髪の少女がぐぬぬとうなる。

金髪の少女は舌打ちし、ため息混じりで呟いた。

「はあ、しゃあねえな、認めてやるよ。コイツが魔王で間違いなさそうだ」

銀髪の少女はうなずき、健史に告げた。

「申し遅れました。私はユズカ・ミストラージ。ここメガリアにて魔導参謀を務めております」

「あたしは魔將軍のラムダ・ズシール。よろしくな」  
ユズカと名乗った少女がうやうやしく頭を下げ、ラムダという少女がふてぶてしい態度で自己紹介をする。

健史は戸惑いながら、一応、挨拶あいさつをした。

「俺は春野健史。よ、よろしく」

「ハルノタケシ様ですか。変わったたお名前ですね」

「さすがは異世界人だな。なんつーか、不気味だ」

「そ、そうかな？ かなり平凡な名前だと思っけど……」

妙な姿をした怪しい美少女二人からジロジロと見つめられ、健史は緊張してしまった。

この状況は一体なんなんだ。アトラクションかなにかなのか。それとも夢か。

なにがなにやら分からないまま、健史は魔王にされてしまったのだった。

ユズカに案内され、健史<sup>たけし</sup>は部屋を出た。

そこは召喚の儀式を行う部屋だったらしい。そしてここは彼女達の拠点であり、居城だという。

部屋を出て、薄暗い石造りの通路を進む。通路の各所に骸骨や蝙蝠こうもりの彫刻が施してあり、非常に不気味な雰囲気だった。

やがて広々とした開けた場所にたどり着く。天井は高く、部屋の中央付近にのみ明かりが灯ともされ、周囲は闇やみに包まれていて果てが見えない。奥にある檀上には、玉座があった。謁見えっけんの間というやつだろうか。

静まり返った大広間を進み、ユズカにうながされるまま、玉座に近付く。

それは髑髏どくろや骨などの奇妙な彫刻が施された巨大な

椅子いすだった。座るように言われ、おそるおそる腰を下ろす。

キヨロキヨロと周りを見回す健史の傍らかたわに立ち、ユズカが呟つぶやく。

「それでは、簡単に現在の状況をご説明させていただき  
ます」

「あっ、はい」

健史がうなずくと、ユズカは玉座の前のなにもない空間に手をかざした。

すると空中にスクリーンのような物が浮かび上がり、  
図形を表示した。どうやら地図のようだ。

「これがこの世界全体の地図です。各地に魔王が存在して  
おります」

ユズカが呟くと、地図に無数の赤い点が表示された。

「初期には一〇八の魔王が出現しました」

「ひゃ、一〇八も？ 多すぎるだろ……」

「現在はかなり減少しております」

「減少？ なんで？」

「魔王同士で潰し合いをした結果です」

「あ、ああ、そういう事か……」

考えてみれば当然か。平和に話し合いやゲームで争っているわけではないのだろう。

しかし、魔王にされてしまった健史としては、殺し合いに参加するのは遠慮したいところだ。

「戦いの例ですが……最強クラスと目されていた、ルシファ

「三世という魔王がいます」

「ルシファーに三世とかいたの？ パチもんくさいな……」

「しかし、魔王モズクによって倒されてしまいました」

「ルシファー、モズクに負けちゃった!? きつとすごいモズクなんだろうな……」

「そんな魔王モズクも魔王ポメラニアンに食べられてしまいました」

「モズク食べられちゃった!? しかもポメラニアンに……」

「ポメラニアンは魔王ロッキーに撲殺されました」

「ひどい！ ネーミングがひどすぎる！」

ポメラニアンをぶん殴る伝説級ボクサーを思い浮かべ、健史は嫌な気分になった。

「ですがロツキーも魔王シ〇ジエノアには勝てず」

「おい！ 誰も知らないと思つてマイナーなモンスター名を出すなよ！」

「シ〇ジエノアは魔王エイリアンに知名度の差で敗北」

「なんだその勝敗の基準！ いい加減にしろ！」

健史が抗議すると、ユズカは表情一つ変えないまま、ポツリと呟いた。

「すみません。途中からは私の作り話です」

「途中からつてどこから？」

「ルシファー三世から」

「最初から全部じゃないか！ 説明する気あるのか!？」

健史が怒鳴つてもユズカはぼんやりした顔のまま首を

かしげるだけだった。天然ボケというやつだろうか。首をかしげたいのはこつちだ。

そこで健史はある事に気づき、ユズカに尋ねた。

「そういや、普通に言葉が通じるのはなんで？ 俺おれがいた

世界の固有名詞も色々知ってるみたいだし……」

実は異世界というのは嘘うそで、やはり大掛かりなアトラクションではないのか。

白状してくれるのを期待して健史が見つめると、なぜかユズカは頬ほおを染め、目を泳がせていた。

「それはその、言語変換の魔法をです……」

「言語変換の魔法？ 本当に？ 怪しいな……」

そこでずっと黙っていたラムダが、ニヤニヤしながら

割り込んできた。

「お前が気絶してる間にユズカが言語変換の魔法を掛けて、記憶の読み取りをやったんだよ。□と□を合わせてなー」

「□と□……って、キスしたって事か!？」

健史が目を向けると、ユズカは真<sup>ま</sup>っ赤<sup>か</sup>になっ<sup>て</sup>顔を伏せ、モジモジしていた。

変な格好をしているが、彼女はかなりの美人だ。こんな美人にキスされたというのか。信じられない。

「す、すみません。目を覚まされた後だとやりにくいので、その前に……」

「そ、そうなんだ……参ったな、キスなんてした事ないのに……」

「私も初めてです……」

ずっと無表情というか、ぼんやりした顔をキープしていたユズカが恥じらう様子はかなり可愛<sup>かわい</sup>らしく、健史はドキッとしてしまった。

気絶している時の話なので記憶がないのが残念すぎる。なぜもっと早く目を覚まさなかったのか、悔しくて仕方がない。

「役得だよな、おい。うれしそうにしやがって、このドスケベ！」

「い、いや、別にうれしそうになんか……」

ラムダが冷やかすように言い、肩を小突いてくる。どうも彼女は遠慮がないというか、物怖じしない性格らしい。



体育会系を連想させる。

ユズカがコホンと咳せき払いばらいをして、努めて冷静な口調で  
呟く。

「ともかく、一〇八いた魔王も潰し合いを繰り返すうちに数が減りまして、今現在、確認できるのは二〇体ほどです」

「二〇体？ それでもまだ多いな……」

地図に点灯していた赤いシンボルが消えていき、五分の一以下になる。見慣れない地形をした異世界の地図を見つめ、健史は質問してみた。

「それで、この城はどのあたりにあるんだ？」

「地図を拡大します」

ユズカが空中に手をかざすと、映像が動き、地図がスクロールした。

中央にある広大な大陸。その左端が拡大され、さらにズームアップしていく。

「拡大……さらに拡大……さらにさらに拡大……」  
「んん？」

大陸の端、海に面したあたりがどんどん拡大されていき、点のような物が見えてくる。

それは大陸から離れた位置にある小島だった。拡大の倍率から考えて、相当小さな島のようだ。

「ちっちゃ！ この小さな島が領土なのか？」

「はい。なにしろここメガリアは小国なので」

「小国にもほどがあるって感じだけど……いや、地図上は小さいってだけで意外と大きかったり……」

「お城から周囲の海が全て見渡せすべます」

「やっぱり小さい！ しかも想像以上に小規模だったー！」  
「なんだか離れ小島の住民が勝手に国を名乗っているような感じだ。」

「自分はそんな超が付くような小国の魔王にされたのか。健史はガツクリきてしまった。」

そこでラムダが、フォローを入れてきた。

「領土は小さいが、ちゃんとした独立国だぜ？ 魔王の

名乗りこそ上げてねえが、歴代の国王は大陸の連中からも一目置かれる魔族だったんだ」

……今、普通に魔族と言ったような。聞き間違いだろ  
うか。

いや、健史も予想はしていた。二人は悪魔のような格好  
をしているし、城の様子は不気味だし、魔王になれとか  
言っているのだから。

要するにここは魔族が支配している世界という事なのか。  
アトラクションなら楽しそうだが、現実リアルなら洒落しゃれになら  
ない。本格的に巻き込まれてしまう前にさっさと帰った  
方がよさそうだ。

「ええと、魔王とは別に国王もいるのか？」

「魔王ってのはこの世界全体を治める王の事だ。当然、  
国ごとに国王や領主がいる。本来、魔王ってのは世界に

一人しかいない唯一無二の存在なのさ」

「それがなんでこんな魔王だらけの状況に？」

「少し前に先代の魔王が引退したんだが、まともな後継者がいなかっただらしい。そしたら世界各地の実力者達が『我こそは次世代の魔王！』って主張しだしてさ。あつという間に百を超える魔王候補が乱立する状況になっちゃまったのさ」

「この世界の覇権を握るべく、魔王の座を狙ってねらいた者がそれだけ大勢いたという事か。

既に五分の一以下となつていふ事、実力を伴わない魔王候補も多かつたのかもしれない。

逆に言えば、いまだに健在の者達はかなりの実力者ぞ

ろいという事になる。

そんな連中と争えといふのか。ますます健史は帰りたくなってきた。

「魔王候補を有した国は他国を攻めまくって領土を拡大してやがるんだ。うちの国にも降伏を迫ってるやつがいてさ。そいつに対抗するために異世界から魔王の資質を持ったやつを召喚する事にしたんだ」

「事情は分かったけど、どうも俺じゃ役に立ちそうもないし、帰らせてもらってもいいかな……」

健史がおそろおそろの呟くと、ラムダはフツと笑い、ユズカに目を向けた。

「帰りたいてよ。どうする、ユズカ？」

「残念ながら、それは不可能です」

「ふ、不可能？　　どういう事だよー！」

するとユズカは、淡々と答えた。

「異世界から魔王を召喚する術は学びましたが、元の世界へ戻す術は知りませんので」

「そ、そんな無責任な！　　呼ぶだけで帰りは知らんってのか！　　この悪魔！」

「確かに私は悪魔族ですが……それがなにか？」

キョトンとしたユズカに、健史はギリギリと歯齧はがみした。

ユズカは少しだけ申し訳なさそうにして、健史に告げた。

「魔王召喚の術は失われし伝説の魔法。この世界のどこかには元の世界へ帰還する方法を記した物か、術を知る

者がいると思います。……たぶん」

「頼りないな。そこは絶対って言ってくれよ」

「たぶん、絶対？」

「頼りねえ！ 不安すぎるだろ！」

頭を抱えた健史に、ユズカが言う。

「魔王を名乗る者達なら失われた魔法の知識を持つ者もいるかもしれない。魔王とは規格外の力を持った魔族ですから」

「みんな自称、魔王なんだろ？ 当てになるのかな……」

「全ての魔王を打ち倒して真の魔王となれば、なんでも思いのままですよ。帰還の方法を探し出すのも容易たやすいでしょう」

「……どうあっても他の魔王と戦わせたいみただな」  
「その通りです」

「正直すぎるだろ！ そこは嘘でも違つと言つて欲しかったー！」  
「嘘ですが、違います」

言われた通りの返答をするユズカに、健史は頭が痛くなつてきた。もしかして馬鹿ばかにされているのか。それとも単に天然なのか。

そこでラムダが割り込んでくる。

「いいから魔王やれよ。ちゃんと務めを果たしてくれりや、あたしが責任持つて元の世界に帰してやるからさ」

「帰す方法が分からないのか？」

「だから、そんな時になつたら帰す方法でもなんでも探し

出してやるって言うてんだよ。約束する」

「……」

当てになるのだろうか。どうも適当に言っているだけのようないきがする。

しかし、健史には帰還方法など分からないのだからどうしようもない。しばらくは彼女達に従っておくしかないか。

「分かったよ。魔王をやればいいんだろ」

「おっ、やる気になったか？ そうじゃなくっちゃ！ よし、

頼んだぜ、魔王！」

たた

肩をバシバシと叩かれ、健史はぎこちない笑みを浮かべた。地図を見ると、小さな島に赤いシンボルが点灯していた。あれが健史を示しているらしい。

「他の魔王達も新たな魔王が出現した事をいずれ知るでしょう。ここへ攻め込んでくる者もいるかもしれませぬ。お気を付けください」

「いきなりハードだな……」

魔王を名乗るほどの者であれば相当な強者ぞろいに違いない。魔王ポメラニアンみたいなやつが攻めてくるのなら助かるのだが……いや、魔王なんて呼称が付くポメラニアンなんかには会わない方がいいか。

ともあれ、健史は魔王をやる事になってしまった。

無論、これはあくまでも元の世界へ戻る方法を得るまでの繋ぎ<sup>つな</sup>であり、暫定的な処置だ。

どこかで誰かから戻る方法を教えてもらえれば、すぐに

でも逃げ出すつもりだ。

そもそも本当にここが異世界なのか、完全には信じていない。詐欺の類である可能性も捨てきれないでいる。今はまだ情報が少なすぎる。状況が把握でききるまでは大人しくしていようと思う。

まずは自分がどんな場所にいるのか確認しようと思い、健史は城内を見て回る事にした。

ユズカに案内してもらい、通路の片隅にある小さな魔法陣に入る。それは移動用の転移魔法陣で、長い距離を瞬時的に移動する事ができるらしかった。

「ここが城の最上階です」

「おおっ、一瞬で移動した!?　すごいな……」  
城の最上階に移動し、外に出てみる。そこからは城全体が見渡せ、島の様子も確認する事ができた。

意外なぐらい、城は大きく立派なものだった。

周りを高い城壁に囲まれ、四方にある塔には大砲らしき物が設置されている。

城そのものも小山のように大きく、あまりの高さに下の方を見下ろすとクラクラした。

それらの建築物は全て黒に近いグレーで塗り潰され、まるで要塞のような外観だった。

城を囲む高い城壁の向こうはもう海だ。島の外周は断崖絶壁となっていて、外部からの上陸や襲撃を防ぐ役目を

果たしているらしい。

「な、なんだこれ。まさに魔王の城じゃないか……」

「お気に召しましたか？」

傍らに控えたユズカがニコリともせず、にやにや、健史は引きつった笑みを浮かべた。

これまでの話から考えて、「ここは邪悪な魔族が支配している世界であり、魔法などが存在しているファンタジー世界で間違いないようだ。そして、この城は魔族の居城と  
いう事らしい。島全体に邪悪な気配が漂ただよっているような気がする。

「えらい所に来ちゃったな……」

「今日からはここがあなた様の居城であり、本拠地です。」

いきなり一国一城の主あるじになれるなんてラッキーですね」  
「こんな物騒な要塞が自分の物だつて言われてもな……  
詐欺にしてもひどすぎるとしか……」  
そこでいきなり、塔の一つに設置された大砲がドゴーン！  
と火を吹いた。

驚いた健史はひっくり返りそうになり、身をかがめて  
ビクビクしながらユズカに尋ねた。

「な、なんだ、何事だ!? まさか、敵襲!?」

「いえ。魔王就任のお祝いに祝砲を撃とうという、ラム  
ダの粹いきな計らいです。うれしいですか?」

「腰が抜けそうになったよ! まぎらわしいな!」  
言われてみれば、いつの間にかラムダがいない。嬉々と

して大砲をぶつ放している彼女の姿が容易に想像できず、しまい、健史は冷や汗をかいた。

外から再び城内に戻る。城の通路はどこも薄暗く、不気味な雰囲気よろいに包まれていた。通路の要所要所に鎧騎士よろいが立っていて、なんだか物々しい。

「この城には何人ぐらいいるんだ？」

「千人ぐらいでしょうか。幹部クラスは私も含めて六名しかいませんが」

「城の規模からすると少ないぐらいか。えーと、国民はどのぐらい？」

「ですから千人ぐらいです」

「城の住人しかいないのかよ!? たったの千人で国が成立するのかわか？」

「我が国は少数精鋭ですので」

少数にもほどがある。そこらの国から攻め込まれたらお終いなのではないか。

「国王が健在の間は、隣国も手を出せずにいたのですが……ここ最近是不穏な動きを見せています」

「そう言えば、国王は？ 留守とか？」

「前国王は隠居されております。なにしろ『高齢でして』『ご高齢って、いくつぐらい？』」

「確か、九百歳ぐらいだったかと」

「そりゃご高齢だ！ 後継者はいないの？」

「ご親族には国王に相応ふさわしい方は一人も……頭が悪かったり、遊び人だったり、戦闘マニアだったりしまして。一応、次期国王の候補はいるのですが、まだ若すぎて王位を継ぐのには早すぎるのです」

魔王と同じく、この国も後継者に恵まれなかつたという事か。どこも大変だな、などと他人事のように考えてしまう。

「じゃあ、今は国王不在なのか」

「いえ。魔王であるあなた様が国王も兼ねていますので」「そうなの!? 魔王って大変だな……」

「国の事は我らにお任せください。魔王陛下は偉そうにふんぞり返って『よきにはからえ』とでも仰っていただければ

いいのです」

「そ、それはそれでなんだかな……」

要するにお飾りの王様なのか。面倒な仕事がなくってほつとした反面、操<sup>あやつ</sup>り人形に選ばれたよう<sup>あやつ</sup>で健史はあまりいい気分ではなかった。

巨大な城の奥深く、やたらと広い、妙に豪華な部屋があつた。

応接室かなにかかと思いきや、個人の部屋だという。珍しげに部屋の中を見回す健史に、ユズカが告げる。

「この部屋をお使いください」

「えっ？　ここが俺の部屋なの？」

コクンとうなずくユズカに、健史は困惑した。

無駄に広く、高そうな家具が並んでいる。この部屋だけで自宅の部屋を全部合わせたよりも広そうだ。

床に敷き詰められた絨毯じゅうたんは暗いワインレッド。天井や壁は真っ黒に塗りつぶされ、家具類も暗い色で統一されていて、髑髏とかトカゲやコウモリなどを象かたどった装飾が施されたものばかりだ。吸血鬼か悪魔の住すみ処か……そんな感じがする。

「寝室は奥にあります」

「そ、そう。なんだか邪悪な部屋だな……」

「魔王様をお迎えするためには、はりきってリフォームしました」

「余計な気遣いだよ！ もっと普通の、狭い部屋でいいのに……」

するとユズカは健史をジッと見つめ、ボンボンとか細かい声で呟いた。

「お気に召しませんでしたか……」

「えっ？ い、いや、そういうわけじゃ……」

「では、この部屋は廃棄して別の部屋をご用意いたしましたよ。私が誠心誠意を込めて改装したお部屋ですが、気に入らないとおっしゃるのでしたら仕方ないですよね……」

「うっ……」

瞳を潤ませ、悲しげに呟くユズカに、健史は困ってし

まった。なんだか厚意を踏みにじってしまったような気

分になり、嫌な汗をかく。

「え、ええと、よく見たらすばらしい部屋だな！ うん、気に入ったよ！」

「……本当ですか？ 無理をされているのでは」

「いやいや、そんな事ないって！ ユズカさんの真心っていうか、おもてなしの心が込められてる感じがしてとても快適そうだよ！ 絶対、この部屋がいいなあ！」

「……」

少しわざとらしくかっただかと思っただが、ユズカは納得してくれたらしく、ニコッと微笑んでいた。

「そう言っていただけとうれしいです。それと……私の事は『ユズカ』とお呼びください」

「えっ、でも……なんか年上っぽいし……」

「ユズカとお呼びください」

「わ、分かったよ。ユズカ」

呼び捨てで呼ぶように言われ、健史はなんだか照れくさくなった。

ついでだと思い、ユズカに告げる。

「じゃあ、俺の事も健史でいいよ」

「いえ、そうはいきません。タケシ様とお呼びしなければ」

「なんか偉そうで嫌だな……」

「魔王であるあなた様は、偉そうではなく偉いのです。

そこはお忘れなきよう」

「……」

なにかこだわりでもあるのか、ユズカは頑として譲らなかつた。

思いきり距離を置かれているようであまり気分がいいものではないが、まだ出会ったばかりなのだし仕方ないかという事で納得しておく。

「それはそうと、タケシ様のお召し物ですが……」

「えっ、なにか変かな？」

朝の登校時に召喚されたので、健史は学校の制服を着たままだつた。

ユズカは彼をジッと見つめ、淡々と呟いた。

「異国情緒あふれるお姿ではありますが、我が国の代表たる魔王陛下としては少々……」

「そ、そうかな。でも、俺は着替えとか持ってきてないし……」

「私のスピアをお貸ししましょうか。おそろいです」「えっ?」

肌の露出が激しいユズカのコスチュームを見て、健史は顔を引きつらせてしまった。

胸元は開きまくりの、むなもとコルセットにひらひらのスカート、ブーツという、黒を基調としたゴスロリ風の衣装だ。

美少女のユズカが着ていれば過激で魅力的だが、自分が着ればどうなるのか。想像するとゾツとした。

「え、遠慮するー！俺には似合わない、ていうか無理だよー！」「……残念です」

本当に残念らしく、ユズカはしょんぼりしていた。だが、すぐに気を取り直した様子で、淡々と呟く。

「では、お召し物をお選びください。魔王陛下に相応しいと思われる物を用意してございます」

「そ、そう。あれ、じゃあ、ユズカの服を着せようとしたのは……」

「あちらです」

健史の疑問をスルーして、ユズカは部屋の奥にある別室に案内した。

そこは衣装部屋で、様々な衣服がズラリと並んでいた。黒革っぽい素材で構成された、鎖やら鉾びょうやらで彩いろどられた物が目立つ。

……なんだか無駄に露出が激しい衣装ばかりのような気がする。やはり健史にもユズカやラムダのような格好をしろというのだろうか。

「これなどいかがでしょう？」

「それ、ほぼ紐ひもだよね!? 君らより露出が激しいのを着ろと!？」

「超格好いいと思いますが……肉体美を強調するデザインですし」

「いや、俺そんなにマッチョじゃないし……風邪引きそうだよ」

「では、こちらは？」

「棘とげだらけでハリネズミみたいじゃないか! もうちよい

普通のはないの？」

ユズカが勧めてくるのはおかしな衣装というか、はつきり言っつて倒錯的な物ばかりだった。彼女に任せていたら大変な事になりそうだ。ここは自分で選ぶしかないか。

黒いマントを見付け、健史はそれを手に取ってみた。

「このマントを羽織はおれば魔王っぽくなるんじゃないかな……」

「なるほど。全裸の上にそれをお召しになるのですね」

「なぜ全裸!? 服の上からだよ!」

「では、こちらのブーメランのビキニパンツとブーツを」「完全に変人じゃないか! 君の魔王に対するイメージっておかしくない?」

制服の上からマントを羽織ってみる。これはこれである意味倒錯的ではあるが、全裸やボンテージよりはマシだ。

「少し地味ですね。これを付けましょう」

ユズカがトカゲかなにかの骸骨を象った肩当てを健史の両肩に貼<sup>は</sup>り付けてくる。

健史の姿をジロジロと見て、ユズカはまだなにか足りないと言いたげな顔をしていた。

「どうも、魔王という感じがしませんね」

「そりゃそうだよ。俺はごく普通の高校生だし」

ユズカは健史の顔を見つめ、頬に触れてきた。ドキッとした健史に、ボンボンと呟く。

「お顔がどうもいけません」

「そ、そうすか」

「少々、かわいすぎます」

「えっ？ そ、そうかな……」

健史から離れ、ユズカは棚からなにか取り出してきた。

それは左右に巨大な角が生えた、不気味な兜かぶとだった。

顔の部分を牙きばが生えた面当ておおが覆うようになっていた。

健史に兜を被かぶらせ、ユズカは満足そうにしていた。

「これならどうにか魔族っぽく見えると思います。ギリギリですが」

「……」

姿見で自分の姿を確認してみる。

制服の上から黒いマントを羽織り、大角が生えた兜を

被った、骸骨の肩当てを両肩に載せる不審人物の姿がそこにあっただ。

顔が隠れているのでどっぴにか様になっているが、魔王に見えるかというところかなり微妙だ。

兜を脱ぎ、健史はため息をついた。

「やっぱり、俺が魔王っていうのには無理があるんじゃないし」  
「……貫禄とかないし」

「そんな事はないです。自信を持ってください」  
衣装については後でまた検討けんとうする事にして、二人は衣装部屋を出た。

健史用の個室を後にして、転移魔法陣を使って移動し、

通路を進む。向かった先は、武器庫らしき部屋だった。

体育館ぐらいありそうな広い部屋には、剣や槍などの武器がズラリと並んでいる。部屋を埋め尽くす大量の物騒な凶器類に健史が圧倒されると、ユズカが呟いた。

「好きな武器をお選びください。魔王っぽいのがいいですね」

「選べって言われても……魔王っぽい武器ってどんなのなんだ？」

伝説の魔剣とか杖つえとか、そういうのだろうか。

健史は室内を歩いて回り、よさそうな物を探してみた。

「この剣とか、格好いいような……」

「呪のろいの剣ですね。一度手にすると敵を百人斬きるまでは

手から離れなくなります」

「うおっ、危なっ！ 危うく触っちゃうところだった……  
なんで呪われた武器なんか置いてるんだよ？」

ユズカはキョトンとして、「それがなにか？」とでも  
言いたそうな顔をしていた。

魔族に普通の感性を期待するのは無駄なのかもしれない。  
うかつに触らないよう注意しつつ、健史は武器を見て回った。  
部屋の奥に、すごく存在感のある武器があつた。縦向  
きに置かれた巨大な黒い大剣で、無数の鎖が巻き付き、  
壁に繋がれている。

「なんかすごいのが……これはどんな武器なんだ？」

「お目が高いですね。それは曰くいわ付きの魔剣です。非常

に強力なのですが、誰も使いこなす事ができず、封印されていているのです」

「扱いにくいのか。じゃあ、俺には無理だな」

しかし、どうも気になる。健史は魔剣に近付き、しげしげと眺めてみた。

「こんなの振り回せるわけないよな……でも、なんだか……」  
そこで剣が淡い光を放ち、フワリと浮き上がった。巻き付いた鎖をブチブチと引きちぎり、健史に近付いてくる。

「な、なんだ？ 俺に使ってみろっつていいのか……？」  
なにかに引き付けられるようにして、健史は巨大な魔剣に触れてみた。

すると魔剣が振動し、表面に細かい溝が無数に走り、そ

の形状を変化させた。

各部が細かいパーツに分解し、それら一つずつが内側に折りたたまれていく。やがて巨大な剣は、刃渡り三〇センチぐらいの短剣サイズになった。

ガシヤンと床に落ちたそれを拾い、健史は首をかしげた。

「なんか小さくなっちゃったけど……なんだこれ？」

「それは魔剣『千変万化』インフイニティ。使い手の意思によって形状を変化させる魔剣です。タケシ様が大きすぎて使いにくいと思われたので小さくなったのでしよう。魔剣があなた様を使い手に選んだのです」

「そ、そうなのか。よく分からないけど、このサイズなら使いやすそうだ。これにするよ」

ユズカがベルトを用意して、それに短剣を提げ、健史の腰に巻く。

武器の選択が終わり、とりあえず装備を調える事ができた。健史の冒険はここから始まるのだ！

「……つて、どこへ行けばいいんだよ！　こんなわけの分からない世界で！　しかもここ島だし！」

頭を抱えた健史に寄り添い、ユズカが呟く。

「とりあえずお食事でもいかがですか？」

「そ、そうだね。そうしようかな……」

城内にある大食堂。巨大な長テーブルがドン、と置かれたそこに案内され、健史は上座の席に座らされた。

やはり食堂も黒を基調とした色で室内が塗り潰され、豪華なのに暗くて陰気な雰囲気だった。

頭に短い角があり、細い尻尾を生やしたメイドらしき悪魔が何人か控えていて、健史は驚いてしまった。

悪魔達はメイド服と思われる衣装を身に着けているのだが、服の各部分が大きく開いていて、スカートは超ミニで、肌が露出しまくっている。俗な言い方だが、なんだかエロい。しかも美人ぞろいだ。

健史がメイド達をジロジロと見ていると、傍らに控えたユズカがボソツと呟いた。

「メイドに興味がおありですか？」

「えっ？ い、いや、そっついうっわけじゃなくて……メイド

さんなんて珍しいからさ」

「そうですか」

ユズカはそれ以上なにも言わなかつたが、妙に冷ややかな目で健史を見ているような気がした。

このエロガキが、と非難されているような気がして、健史はあまりメイドを見ないようにした。

やがてメイドが料理を載せた大皿を運んできた。笑顔を向けられ、健史は照れてしまった。

大皿の上にはでっかい肉の塊があり、湯気を立てている。食欲をそそるいい匂においがして、健史はゴクリと喉のどを鳴らした。

「これはなんの肉なんだ？」

「近くの島で捕れる、不死鳥の肉です」

「不死鳥なのに死んだの!? 食べてもいいのかな……」  
ナイフやフォークに似た食器が置いてあり、それらを使って健史は食べてみた。味は悪くない。というか、かなり美味だった。

「ユズカは食べないの？」

「ここは王族専用の食堂ですので。後で別室にて済ませます」

「そう言わずに、一緒に食べよう。こんなに席が空いてるんだし」

「……では、失礼します」

健史から見ても右側の並びにある空席に着き、ユズカも

食事をとり始めた。

そこで食堂入り口の扉が開き、長い金髪をなびかせた少女、ラムダが入ってきた。

「あー、腹減った！ おっ、お前らも飯か？」

ラムダは健史の左側の並びにある空席に近付き、椅子を引いてドカッと腰を下ろす。向かいの席に座るユズカを見て、ラムダは意外そうな顔をしていた。

「ユズカがいるなんて珍しいな。お前、ここで食べるの嫌がってたのに」

「タケシ様が一人だと居心地が悪そうだからよ」

「ふーん。えらくコイツが気に入ったみたいだな？」

「……別に」

ラムダから冷やかすように言われても、ユズカは無表情をキープしていた。

そこである事に気づき、健史は尋ねてみた。

「ここは王族専用の食堂って聞いたけど……じゃあ、ラムダは王族なのか？」

「おう、その通りさ！ こう見えてもあたしは前国王の血統で、次期国王候補なんだぜ！ すげえだろ？」

「……」

得意げに大きな胸を張るラムダを見つめ、健史はぎこちない笑みを浮かべた。

若すぎて国王には相応しくない、というのはラムダの事だったのか。ちよつと納得した。

「頭が悪くて遊び人で戦闘マニアっていうのはラムダの事なのか？」

「なんだその言いぐさは!? あっ、さてはユズカだな！  
なにも知らないヤツにでたらめ吹き込むなよ！」

「私はラムダの事だとは一言も言っていないわ。なにか  
思い当たる節でもあるの？」

「て、てめえ……相変わらずいい性格してやがるな……」  
すまし顔のユズカに、ラムダがぐぬぬとうなる。

二人の力関係が分かった気がして、健史は苦笑した。

「そうすると、ラムダは一応お姫様になるのか。これが  
お姫様……へえ……」

「なんだよ、なにか言いたそうだな。あたしが王族で姫

「じゃ悪いのかよ」

「いや、全然。お姫様のイメージぶち壊しすぎだろとか思っ  
てないよ？」

「言ってるじゃねえか！ けっ、どうせあたしは姫って柄  
じゃねーよ。笑いたきや笑え」

「ははは」

「本当に笑うなよ！ 泣くぞこの野郎！」

実は結構気にしているのか、ラムダは涙目になっていた。  
健史はあせり、慌ててフォローを入れた。

「おや？ よく見るとそこはかたなく気品が感じられる  
ような……」

「ふ、ふん、お世辞なんか言われてもうれしくななかね

えし。どうせあたしなんか……」

「いやいや、野性味あふれるお姫様って感じで格好いいよ。姫騎士というか姫バーサーカーというか、そんな感じ?」

「おっ、そうか? いやあ、そこまで言われると照れるなあ。……今、バーサーカーって言わなかったか?」

「いい意味でだよ。超ほめています」

「そうかあ? ま、いいけどさ」

ラムダは気持ちの切り替えが早いのか、のんきに笑っていた。

胸を撫なで下ろした健史をユズカがジッと見つめ、「意外とうまが上手いのですね」とでも言いたげな顔をしていたが、健史は気付かない振りをした。

次々と料理が運ばれてきて、テーブルを埋め尽くしていく。気味の悪いグロテスクな魚の丸焼き、怪しい極彩色のキノコ、不気味な植物のサラダなどが出てきたが、健史は最初に出てきた鶏肉のみを食べておいた。

ユズカは上品な仕草で黙々と食事を続け、ラムダは豪快に食いまくっている。どちらも女性とは思えない食事量で、健史は圧倒されてしまった。

「なんだ、お前、少食だな？　遠慮せずにながつつり食えよ」

「俺は君らの食べっぷりに驚いてるんだけど……この住人はみんなそんなに大食いなのか？」

するとラムダとユズカは顔を見合わせ、すまし顔で答えた。



ラムダはどこか安堵あんどしたように笑い、ユズカはジツと健史を見つめていた。

大皿の鶏肉をどうにか食べきり、健史は食事を終えた。ラムダとユズカは健史の十倍ぐらいの量をペロツと平らげ、満足そうにしていた。

メイドが空の食器を片付けていく。健史が一息ついてみると、再びメイドがやって来た。

テーブルの上に、大量の果物類が置かれる。目を丸くした健史をよそに、ラムダが笑顔で言う。

「やっぱ食後は甘い物食わないとな！ 別腹、別腹！」

「い、いや、さすがにもう無理……」

やはり彼女達は大食いだ。健史は苦笑するしかなかった。

食事を終え、しばらくまったりしていると、どこかからドーン、という轟音ごうおんが聞こえてきた。

また誰かが祝砲でも撃ったのか。健史が首をひねっている、ラムダとユズカが椅子をガタンと鳴らして立ち上がった。

「チツ、また来やがったか。しつこい野郎だぜ」  
「来たって、誰が？」

健史が尋ねると、ユズカが静かに答えた。

「隣国の使者です。このところ、頻繁にやって来るのです」  
「よその国の？ 遊びに来てる、って感じじゃないな」  
「ええ。我が国に降伏を迫っています。要するに、敵です」

「敵？」

ラムダが険しい顔をして、いまいま忌々しげに叫ぶ。

「ヘルドミルのやつらさ！ 魔王を立てて、急激に勢力を拡大してやがる！ うちが小国だからってナメやがって……！」

「ど、どうするんだ？」

「追いつ返すに決まってるんだろ！ ガタガタ抜かすようならばっ殺してやる！」

言うが早いか、ラムダは食堂から飛び出していった。うるたえる健史に、ユズカが告げる。

「タケシ様もお出でください。敵がどのような者どもなのか知っていたただきたいのです」

「だ、大丈夫かな。危なくない？」

「私がお守りします。ご安心ください」

ユズカにうながされ、健史は席を立った。

正直言っただけで恐ろしいが、女性であるラムダやユズカが迎え撃つつもりでいるのだ。自分だけ安全な所に隠れているのは気が引ける。

それに、敵というのがどんな連中なのか見てみたいとも思う。いずれは健史も戦わなければならぬかもしれないかもしれないのだから。

ユズカに案内してもらい、向かった先は城の中腹にある展望台のような場所だった。

石造りの広々とした床が屋外に張り出して、ヘリポートのような造りをしている。おそらく空から城に入りをするための場所なのだろう。

既にラムダがいて、上空を見上げています。

そこには、空中に浮遊した怪しい魔族の姿があった。

「ククク、いい加減、降伏したらどうだ？ 弱小国の

いなかも田舎者ども……！」

白い仮面を着けた、漆黒のローブに身を包んだ怪人。

そいつは宙に浮き、部下らしき者どもを引き連れていた。

蝙蝠のような翼を広げた、青銅色の屈強な魔人達。二〇

体ほどいて、それぞれが長い槍を装備している。

ラムダが仮面の怪人をにらみ、怒りをあらわにして叫ぶ。

「テメーの国だつて大陸の端っこにある小国のくせに！  
ナメてんじやねーぞ！」

「確かに我がヘルドミルは小国だつた。しかし、それも過去の事。魔王陛下が名乗りを上げた以上、他国を全て征服し、一気に領土を拡大するまで。貴様らも早く我らの軍門に下るがよい……！」

相手の高圧的な物言いに、ぐぬぬとうなるラムダ。城の各部からは大砲の砲身が迫り出して、宙に浮かぶ敵集団に狙いを付けている。

まさに一触即発という状況だ。いきなり緊迫した場面に遭遇し、健史は息を呑んだ。

傍らに控えたユズカが身を寄せてきて、小声で囁いて

くる。

「どうやら向こうはまだ、こちらに魔王がいる事を知らないようです。タケシ様は戦う準備ができていませんし、魔王である事を悟られないようにしてください」

「わ、分かった。でも、どうするんだ？ 降伏を迫ってきてるみたいだけど」

「そうですね……」

ユズカは無表情で宙に浮かぶ怪人を見上げ、スツ……と右手を上げた。

上空に掌をかざし、ボンツと眩く。

マグナブラスト  
「爆滅轟波」

直径約一メートル、炎の塊のような球体が出現し、射出

される。

球体が仮面の怪人を直撃、ドゴーン！ と大爆発だいばくはつを起こす。健史は仰天し、ユズカに叫んだ。

「ええっ!? い、いきなりなにしてんの!？」

「むかついたので。攻撃です」

「む、無茶苦茶だ……ユズカって実は怖い人？」

「そんな事はありません。普通です」

普通ってなんだ。すまし顔のユズカに健史の顔は引きつるばかりだ。

やがて爆発による煙が晴れ、仮面の怪人が姿を現す。ダメージはないらしく、まったくの無傷だった。

「ふん、問答無用で攻撃とは恐れ入る。さすがはユズカ・

ミストラージ。メガリアが誇る最強の魔導師よ……」  
「塵も残さず消してやるつもりだったのに。なぜ生きて  
いるの？」

「我は魔王陛下よりお力をいただいている。貴様らの術  
など我には通用しない。抵抗は無意味と知れ……！」  
怪人が得意げに告げ、ユズカが眉根をまゆね寄せせる。

「魔王の力で強化されているようですね。これはまずい  
かも」

「ど、どうするんだ？」

「降伏するつもりはありません。徹底抗戦あるのみです」  
「でも、攻撃が通用しないんじゃないじゃ……」  
そこでラムダが叫ぶ。

「けっ、あんなのハツタリさー！ 大方、魔法に耐性のある装備でもしてるとんだらうが……仮に魔法が効かないとしても、物理攻撃ならいけるはずだぜ！」

ラムダは巨大な剣を手にしていた。剣を構えて跳躍し、上空に浮かぶ怪人に斬り付ける。

「おりゃあ！」

ザン、と袈裟斬りの軌道で切断され、怪人のローブが引き裂かれる。

ローブの下には黒い全身鎧があった。鎧に傷一つないのを目にして、ラムダがギョツとする。

「な、なんだその鎧は？ あたしの剣が通用しないなんて……！」

「ラムダ・ズシール。魔剣士として名高い貴様の剣技もまた解析済みよ。あらゆる術を防ぎ、物理攻撃も通さぬこの鎧こそが、魔王陛下からいたただいた力なのだ！」

怪人が腕を振るうと、鎧の前腕部から鞭むちのような物が瞬間的に伸びて、ラムダを襲った。

鞭の一撃を剣で防いだものの、ラムダは弾き飛ばはじされてしまった。

そこでラムダは背中に蝙蝠のような翼を生やしてバサツと展開し、落下の勢いを殺して展望台に着地した。

「く、くそ、あいつ、強いぞ……！」

ユズカがうなずき、表情を険しくして呟く。

「私達の力を解析した上で、それに対抗でききる鎧を作り

上げたようね。大した技術だわ」

「感心してる場合かよ！ あの野郎、このまま城を制圧するつもりだぜ！」

「私とラムダが勝てないので、他の者では無理だし……せめて残りの幹部達がいてくれれば……」

幹部は六名いるが、ユズカ達以外の四名は不在らしい。敵はたったの二〇名程度だというのに、この巨大な城が制圧されてしまうのか。健史には信じられなかった。

怪人は破れたローブを脱ぎ捨てて鎧姿になり、ユズカ達に向かって叫んだ。

「貴様らさえ倒してしまえば城は落ちたも同然！ 覚悟するがいい！」

怪人が急降下してきて、伸縮自在の鞭を猛然と振るい、ユズカ達を襲う。

「う、うわっ……！」

健史は息を呑み、身をかがめて頭を低くした。ラムダは大剣を盾にして攻撃を防いだが、健史には身を守る術すべがない。

怪人は広範囲に渡ってでたらめに鞭を振り回している。間違はなく巻き込まれてしまう。

そこでユズカが健史に飛び付いてきた。健史を抱え込むようにして庇かばい、彼を鞭から守る。

「あうっ！」

その背に鞭を受け、ユズカが短い悲鳴を上げた。

怪人はあたり一面を鞭で打ち、上空へ舞い戻っていった。健史は驚き、グツタリしたユズカを抱きかかえた。

「し、しっかり！　なんで俺なんかを庇って……」  
するとユズカは苦しそうにしながら呟いた。

「私が守ると約束したので……お怪我<sup>けが</sup>はありませんか？」

「う、うん。おかげさまで」

「そう。よかった……」

弱々しく微笑み、ユズカはカクンと頭を垂れた。どうやら気を失ったらしい。

周りを見てみると、石で固められた展望台の床は、特大のフォークでガリガリと引っかかれたように細い溝が

無数に刻まれていた。

あれをユズカは身体で受けたのか。健史を守るために。  
「……」

ユズカを床の上にそっと寝かせ、健史は立ち上がった。

……魔王だの魔族だの魔法だのと、この世界は非常識で分からない事だらけだ。

正直言つて、なにが善でなにが悪なのか、異世界からやって来た健史には分からない。

分からないが……直感的に分かる事はある。

あの鎧男は敵だ。少なくとも善人であるはずがない。それだけ分かれば十分だろう——。

上空に浮かぶ鎧姿の怪人をにらみ、健史は低い声で呟いた。

「おい、そこの。ちよつと下りてこいよ……」

「なんだ貴様は？ 見ない顔だが、女どもの従者か？」

「俺が誰だろうとどうでもいい。丸腰の女を鞭なんかで叩きやがって、このクソ野郎が……殴ってやるから下りてこい」

すると怪人は、含み笑いを漏もらした。

「ククク、随分と勇ましいな、小僧。面白おもしろい、その度胸に

免じて少しだけ付き合っつてやろう」

怪人がゆっくりと下りてきて、健史の前に着地する。

身長は二メートル近いが。全身鎧に包まれた身体は大  
きく、屈強な身体付きをしている。

殴り合いをしても勝てそうにないが、健史はどうしても  
許せなかった。

ユズ力を傷付けたこいつを、ぶん殴ってやらないと気が  
済まない。たどえ勝てなくとも。

「で、どうする？ 貴様が私の相手をしてくれるのか？」

「ああ。一発、くらわせてやる……！」

右の拳<sup>こぶし</sup>を握り締め、健史は身構えた。

鎧の怪人は健史の構えや動作から実力を推し量り、仮  
面の奥でニヤツと口元を歪<sup>ゆが</sup>めた。

……この男、素人<sup>しろうと</sup>だ。武術の心得などまったくないと

見た。

しかも魔力らしきものを欠片かけらも感じない。兵士ですらない、一般人か。

こんなやつに殴られたところで鎧には傷一つ付かない。それどころか向こうの拳が砕けるのではないか。

勝利を確信し、怪人は両腕を左右に大きく開いて、健史に告げた。

「いいだろう、好きなだけ殴るがいい」

「……いいのか？」

「構わぬ。さあ、打ってみろ！」

「……」

無防備な姿をさらしてみせた怪人に、健史は首をひねった。

意外と話の分かるやつだったのか。それとも、あの鎧に絶対的な自信があるのか。

間違いなく後者だろうが、せっかく殴らせてくれると  
いうのだ。思いきりやらせてもらおう事にする。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

気持ちを引き締め、前へと踏み込み、拳を振りかぶる。  
頑丈そうな鎧の腹部を狙い、全力で拳を叩き込む。

「おりゃあ！」  
ドゴン、と。

重く、低い激突音があたりに響き渡り、そして――。  
ゴオツ、と大気を引き裂き、黒い塊がすっ飛んでいく。  
それは、全身鎧で身を固めた怪人だった。大砲から撃ち

出された砲弾のごとく勢いよく吹き飛び、城の周りを囲む城壁の内側に激突、ズズン、という重低音をあたりに響かせる。

「……あれ？」

拳を打ち込んだポーズのまま、健史が間の抜けた声を漏らす。

どうせ効くはずがない、少しでもダメージを与えられたらラッキー、ぐらいの気持ちで打ち込んだのだが……。びっくりするほど手応えがなかった。ビーチボールでも殴ったような感じだ。

もしかすると、あの鎧は見せかけだけで紙のような素材でできていたのかも……。そう錯覚してしまうぐらい、

軽い手応えしかなかった。

城壁にめり込んだ怪人の方はと言えば、なにが起こったのか理解できずにいた。

「な、なにがどうなつて……他にも敵がいたのか……?」  
身体を起こし、腹部を見てみる。分厚い装甲がベコツとへこみ、陥没している。

拳の形がクツキリ残っているのを確認し、怪人は仮面の奥でギリツと歯噛みした。

「……お、おのれ！ やりおつたな、小僧！」

城壁から抜け出し、猛スピードで展望台へと飛翔<sup>ひしろう</sup>する。相手の力を見誤っていた。おそらくあの男はすさまじい

怪力の持ち主だったのだろう。

だが、それさえ分かっただけで済ませれば大した相手ではない。速度で翻弄し、手の届かない距離から鞭で攻撃すればいいのだ。

怪人は展望台に戻ると、そこでさらに飛翔速度を上げ、健史の真後ろへと回り込んだ。

すかさず鞭を振るい、死角から攻撃する。この鞭は鎧と同じ素材でできていて、細かい装甲を蛇腹状に組んだものだ。少々頑丈な鎧程度なら容易く八つ裂きにする事ができる。

狙いは頭部の付け根、威力は手加減なしの全力。健史の首を飛ばすつもりだ。

鞭が首筋にバシツと命中し、彼は仕留めた、と思った。  
だが――。

「……いてえな。不意打ちかよ」

「なっ……なにいつ!？」

健史が首を押さえ、痛そうにしながら振り返ってくる。  
まともに命中したはず。なのになぜ首が落ちないのか。  
理解できない。

「お、おのれえ！」

怪人は猛然と鞭を振るい、健史を全力で滅多打ちめったにした。  
なのになぜか、健史には効かない。いくら打つてもマ  
ントが破れるだけだ。防具らしき物はなににも身に着けて  
いないというのに。

マントの下に着ている制服までズタズタに引き裂かれて  
しまい、健史は鬱陶うつとうしそうに顔をしかめた。

「くっ、この……いてえって言うてるだろー！」

「!？」

鞭をガシツとつかみ、思いきり引っ張る。

抵抗もできずに勢いよく引き寄せられた鎧の怪人に、  
健史は二発目の拳を叩き込んだ。

拳が顔を覆う仮面にめり込み、怪人の素顔をメキヤツと  
潰す。

「げぶうつー！」

鎧の怪人は血反吐をぶちまけながら吹き飛び、展望台の  
床を転がった。

健史は怪人の素顔を見てやろうとしたが、彼の顔はグチャグチャになっっていて人相が分からなくなっていた。

「なんだコイツ。意外と弱かったのか？」  
あまりの手応えのなさに、首をひねる健史。

鎧の怪人の見立て通り、健史は武術の心得などない素人である。

怪力の持ち主などではないし、なぜ勝てたのか、健史自身にも分からなかった。

全てを見ていたラムダは、口をあんぐりと開けて呆然とぼうぜんしていた。

「なっ、えっ、あれ？ ど、どうなってんだ……？」

「……あれが魔王の力よ。『アンリミテッドパワー際限なき力』といったところかしら」

呟いたのはユズカだった。よろめきなながら起き上がり、なにもかも予想通りという顔で健史を見ている。

「お前、あいつの力を分かってたのか？」

「……いいえ、全然。今、初めて知ったわ」

ラムダはガクツとして、ユズカをジロツとにらんだ。

「なら、なんで予想通り、みたいな顔してんだよ？」

「魔王として召喚したのだから、なんらかの力を備えているはずだとは思っていた。まさかあんなにあっさりと力を示すとは思いつきもなかったけど」

「そういう事か。しかし、無茶苦茶だな、あいつ。武器や

魔法なしで、魔力や闘気も使わずに素手であの鎧野郎を仕留めちまうなんて……強いとかいう次元じゃねえぞ」「ええ。これは期待以上だわ」

上空に待機していた魔人達が下りてきて、鎧の怪人を抱え上げて空へと逃げていく。

飛び去っていく彼らを見上げ、健史はユズカ達に尋ねた。

「あいつらは逃がしていいのか？」

「逃げるやつはほっとけよ。いいよな、ユズカ？」

「そうね。連中が国に戻れば、うちに手を出すとどうなるのか示す事ができるでしょうし。このまま帰した方がいいわ」

健史はうなずき、ハツとしてユズカに駆け寄った。

「だ、大丈夫か？ 怪我はない？」

「このぐらい、平気です。大した事は……っ！」

「無理しないで。早く手当てしないと……」

よろめくユズカに寄り添い、肩を抱いて支える。

ユズカはほんのりと頬を染め、戸惑ったように目を泳がせていた。

「あ、あの。本当に大丈夫ですから……」

「いいから。医務室とかあるのかな？ 早く行こう」

「……」

表情の変化に乏しいユズカが明らかに照れているのを見て、ラムダはニヤニヤと笑っていた。

「あのユズカがあんな顔するなんてな。あの野郎、マジでただもの只者じゃねえかも……」  
城内へと歩いていく二人を眺め、ラムダは慌てて後を追った。

\*

翌朝。  
健史たけしが目覚めると、そこは住み慣れた自分の部屋だった——。

……なんて事にはならなかった。  
「うーん……知らない天井てんじょうだ……」

一度言ってみたかった台詞を呟き、健史は自嘲気味に笑った。遊んでいる場合じゃないのに、我ながらのんきなものだと思う。

ここは異世界で、魔族が支配する城に自分はあるのだ。一刻も早く元の世界に帰る方法を見付けなければ。

やたらと広いベッドの上で身を起こし、健史があくびを漏らししていると、何者かが声を掛けてきた。

「おはようございます、タケシ様」

「えっ？ ユ、ユズカ……？」

銀色の長い髪をした魔族の少女、ユズカがベッドの傍らかたわに立っているのを見て、健史は目を丸くした。

今日もユズカは肌の露出が激しいゴスロリっぽい衣装

を着ている。胸の大きなふくらみは明らかに面積が足りていない布地にかろうじて収まっている状態で、豊満なバストが今にもこぼれ出てしまいそうだ。

慌ててユズカの胸元むなもとから目をそらしつつ、健史は挨拶あいさつを返した。

「お、おはよう。えっと、もしかして起こしに来てくれたの？」

「いえ。お目覚めになるまで待機していました」

「俺おれが起きるのを待ってたの？ それなら起こしてくれてもよかったのに」

「申し訳ありません」

「いや、別に非難してるわけじゃ……そんなにかしこま

らないですよ」

相変わらずユズカはぼんやりした顔をしていたが、昨日とは少し様子が違うような気がした。

なんとなく表情が柔らかいような感じがする。潤んだ瞳ひとみでジッと見つめられ、健史は照れてしまった。

「お食事の用意ができています。お召し替えを」  
「あ、ああ、分かった」

健史は真っ黒のガウンみたいな寝間着を着せられていた。ベッドやシーツも暗い色で統一されていて、変な感じだ。ベッドの傍らには着替えが用意されていた。昨日の戦いでズタズタにされたはずの制服とマントが新品同様になっているのに気づき、健史は首をかしげた。

「あれ、服が元通りに……どうなってるんだ？」

「魔法で再生しました。このぐらい造作もない事です」  
なるほど、魔法か。さすがはファンタジー世界だ。  
ベッドから下りて着替えようとすると、ユズカが身を  
寄せ、寝間着に手を掛けてきた。

「ユ、ユズカ？ なにを……」

「お召し替えのお手伝いを。私にお任せください」

「い、いや、いいよ。自分でできるって！」

健史が断ると、ユズカは瞳をウルウルさせ、悲しそうな  
顔をした。

「私に触れられるのはお嫌ですか……」

「そ、そうじゃなくてさ。恥ずかしいんだよ」

「お気になさらずに。魔王陛下は堂々としていればいいのです。むしろ脱ぐのが当たり前みたいな感じで」

「無茶言うなよ！ 魔王ってそういうものなのか？」

「さあ？」

首をかしげるユズカに健史は頭が痛くなってきた。彼女はやはり天然さんなのだろうか。

健史の隙を突き、ユズカはすばやく彼から寝間着を脱がせてしまった。下着姿になつてうるたえる健史に構わず、シャツを手にして袖を<sup>そで</sup>通させる。ズボンまではかされてしまい、健史は恥ずかしくてたまらなかつた。

ユズカは無表情だったが、ほんのりと頬を<sup>ほお</sup>染めていて、平気というわけでもなさそうだった。

「すみません。男性の着替えを手伝うのは初めてなので……慣れていなくて」

「だったら無理しなくていいのに。もしかして、誰かに命令されてるの？」

「いえ。現在、この城において私に命令できる立場にあるのはタケシ様だけです」

「なら、なんで？」

ユズカはジツと健史を見つめ、淡々と答えた。

「私がお世話したいと思ったからです。ご迷惑でしたか？」

「迷惑ってわけじゃ……ま、まあその、無理しなくていいから。そういうのは程々に頼むよほどほど」

「はい」

コクンとうなずき、ユズカは満足そうにしていた。魔王となった健史の世話を焼く事に使命感でも抱いているのだろうか。健史には彼女の考えがよく分からなかった。

制服の上からマントを羽織はらおされ、部屋を出て食堂へ向かう。

食堂に入り、健史を上座の席まで案内してから、ユズカはいずこかへ姿を消してしまった。

なにか用事でもあるのだろうか。ちよつとだけ寂さびしく思いながら、健史は朝食が運ばれてくるのを待った。

やがて、料理が運ばれてきた。運んできたのが通常のメ

イドではなくユズカだったので、健史は驚いてしまった。

「お待たせいたしました」

「ユ、ユズカ？ なにしてるんだ？」

すまし顔で健史の前に料理を並べるユズカに、呆気あっけに取られてしまう。

それというのもユズカの服装がゴスロリ服からメイド服に替わっていたからだ。

メイド達が着ていた物と同じく、メイド服は各部が開いていて肌の露出が激しかった。

胸回りが大きく開き、豊かすぎるバストがあふれてしまふとももいそうだ。スカートは超ミニで、白い太股ふとももがまぶしい。ユズカはプロポーションがいいだけに、メイド服も抜群に

似合っている。

ユズカはすまし顔で、平然と答えた。

「タケシ様がメイドをお好みのようでしたので、私もメイドになっってみました」

「いや、別にメイド好きってわけじゃないよ？ 誤解だー！」

「……変でしよつか？」

「へ、変じゃないし、すごく似合ってるけど……」

「よかった。ご満足いただけましたよ」

ニコツと微笑み、ユズカはうれしそうにしていた。

要するに健史をもてなしてくれているのか。それはありがたいが、メイド好きだと思われても困る。嫌いじゃないが。



健史が食事中も、ユズカは傍らに寄り添うように立っていた。なんだか妙に近いので、健史は緊張してしまった。

「ユズカは食べないの？」

「先に済ませました。申し訳ございません」

「いや、別にいいけど……ええと、その、そんなに近くに立たれるとちよつと……」

「嫌ですか？ 私が傍そばにいると不快だと……」

「そ、そんな事はないけどさ。少し緊張するかなあ、って」  
ユズカは健史をジッと見つめ、瞳をウルウルさせていた。そんな顔をされては「近いから離れて」とは言えなくなってしまう。健史はため息をつき、ユズカに告げた。

「ま、まあ、別にいいけどさ。ユズカがしたいようにしなよ」

「はい。ありがとうございます」

ニコツと微笑み、ユズカはさらに身を寄せてきた。彼女の身体に肘が当たってしまった。健史はドキツとした。慌てて肘を引き、当たらないように注意しながら食事を続ける。するとユズカはペタツとくっついてきて、柔らかい身体を健史に接触させてきた。

「い、いや、あの、さすがにくっつきすぎ……」

「お嫌ですか？」

「い、嫌じゃないけどさ……」

また泣きそうな顔をされても困るので、健史は強く拒めなかった。

ユズカはベツタリとくっついたまま離れず、健史の食

事を見守っていた。

肩のあたりにすさまじく大きく柔らかい胸のふくらみがムニユツと押し付けられている。おかげで健史は食事に集中する事ができなかつた。

ちなみに朝食は紫色のパイみたいなもので、割と美味だつた。どうにか食べ終え、血の色をしたお茶らしきものを飲んで一息つく。

「ふう。ええと、今日はなにをすればいいのかな?」

「特に」予定は「ありません。お仕事が入るまで」ゆるりとおす「しくだせ」ませ

「仕事って?」

「魔王として戦う事です」

「あ、ああ、そうなんだ……」

つまり健史は戦闘専門の人材という事なのか。どうも実感が湧かないが。

しかし、ゆっくりしろと言われても困る。こんな巨大で不気味な魔族の居城でなにをすればいいのやら。漫画の本かテレビでもあれば暇を潰せるのだが、ここにそんな物があるはずもない。

「あっ、そう言えば……」

上着のポケットを探ってみるとスマートフォンが入ったままだった。

取り出したそれをジッと見つめ、健史は苦笑した。

「異世界じゃ使いようがないよな。ネットに繋がるわけも

ないし……」

使い道を考えてみて、ハツとする。通信機能は使えなくとも、他にも色々ほかな機能があるじゃないか。

ベツタリとくつついたままのユズカに少し離れてもらい、健史はスマートフォンスマートフォンの電源を入れた。

「あのさ。写真撮ってもいいかな？」

「写真、ですか。よく分かりませんが、どつぞ」

「ありがとう」

カメラアプリを起動させ、レンズをメイド姿のユズカに向ける。不思議そうにしている彼女の顔を撮り、上半身のバストアップや全身像も撮影させてもらおう。

「うん、いいね。異世界に来た記念に色々撮っておこう」

幸い、本体のメモリやSDカードには十分な空きがある。バッテリーが切れるまでたっぷり撮影できそうだ。

ユズカは首をかしげ、健史に問い掛けてきた。

「それはもしや、異世界の道具ですか？」

「うん、そう。本当は通信用の道具なんだけど、写真を撮る機能もあるんだ。えーと、写真ってというのは……」

「映像を記録するのですね。タケシ様の記憶を読んだので知っています」

そう言えば、召喚された時にそんな事を言っていた。

同時に、ユズカにキスされたという事を思い出し、健史は赤面した。動揺を誤魔化すように尋ねてみる。

「じゃ、じゃあ、俺がいた世界の事は大体分かるの？」

「はい。全てすべてというわけではないですが。一度に読み取れる記憶には限度がありますので……」

ユズカが人差し指で自分の唇に触れ、頬を染める。彼女も思い出しているらしいと悟り、健史は耳まで真まっ赤かになった。

「この世界にも映像を記録する方法はあります。魔法を使うのですが」

「へえ、そうなんだ。異世界でもやる事はそんなに変わらないんだな」

この世界では科学よりも魔法による文化や技術が発達しているわけか。やはりファンタジー世界だ。

納得したようにうんうんとうなずく健史をぼんやりと

した顔で見つめ、ユズカはポツリと呟いた。

「そう言えば……タケシ様の記憶に写真という物に関する事柄がいくつもありました」

「ふーん、そうなんだ」

「女性が扇情的なポーズを取っている物ばかりでしたが」「ぶっ！ ちよ、ちよっと待った！ なんの記憶を読んでくれてるんだよ!?」

健史は高校に入学して間もない高校生だ。割と真面目まじめというか平凡な人間である。

当然ながら、異性には普通に興味がある。そんな彼がエロ的なグラビアなどを見ても不思議ではない。むしろ見ていない方がおかしい。

しかし、そういったものを見た記憶を女性であるユズカに知られてしまったのはショックだった。

あれか、それともあれなのか。自分が今までに見た工口的なものを使い浮かべ、健史は冗談抜きで死にたくなつた。ユズカはぼうつとした顔のままだったが、かすかに頬を染めていた。

「ご安心ください。あまり詳細な記憶は読んでいません」「そ、そうなの？ ならいいけど……」

『ミニスカ制服』や『紐ひもビキー』なんて知りません」「知ってるじゃないか！ い、いや、違うんだ！ そういものが好きでたまらないとかじゃなくてね？ 印象に残ってるっただけで……」

『メイド服・着エロ』とはなんでしよう?」

「検索ワード出ちゃった! 頼むから記憶から消去して!」

うろたえまくる健史を澄んだ瞳で見つめ、ユズカは目を閉じ、小さくうなずいた。

「異性に興味を持つのはごく自然な事です。お気になさいませんよう」

「ありがとう。そう言ってもらえると助かるよ……」

「ですが、あまり倒錯的なのは……異世界人の好みというのはちょっと怖いですね……」

「露出過多なコスが普通の異世界人から変人扱いされちゃった!? 俺っておかしいの? いや、俺がいた世界その

ものがおかしいのかも……」

頭を抱えた健史を見つめ、ユズカはクスツと笑った。

食堂を後にした健史は、城内を見て回る事にした。この城はおそろしく規模が大きく、ショッピングモール何個分なのかといった広さだ。まだ見ていない区画がたつぷり残っていて、暇潰しひまつぶになりそうだった。

ユズカはメイド服からゴスロリっぽい衣装に着替えていた。細長い尻尾しっぽをフリフリしながら健史の傍らに寄り添い、彼に腕を絡ませからてくつつき、城内の案内役を務めてくれた。

小さな布地にどっぴにか収まっている状態の豊満なバスト

を二の腕に押し付けられ、健史は赤面した。

すさまじく大きくて柔らかく、一体何カップなのかと思わずにいられない。巨乳が売りのグラビアモデルも裸足で逃げ出してしまうような大きさだ。

「と、ところでユズカ、怪我は大丈夫なの？」

「治療魔法を受けています。問題ありません」

「そっか。よかった」

健史を庇って受けた傷は治療済みらしい。ユズカのほぼ剥き出しの背中に傷痕がないのを確認し、健史は胸を撫で下ろした。

ユズカは潤んだ瞳で健史を見つめ、ボソツと呟いた。

「昨日のタケシ様、素敵でした。とてもお強いのですね」

「い、いや、どうだろ。相手が弱かったただけじゃないかな」  
自慢ではないが、健史は腕力に自信がない。殴り合いの喧嘩けんかなどほとんどやった事がないし、運動も苦手だ。

これほど『強さ』に縁がない人間も珍しいんじゃないかと自分で思うぐらいだ。昨日のあれは奇跡か、そうでなければ相手が弱かったとしか考えられない。

「あの敵はかなりの実力者でした。私やラムダではまるで太刀打ちたちうちできませんでしたし。そんな強敵をあつさり倒したのですから、タケシ様のお力はすさまじいものです。自慢されてもよろしいかと」

「そ、そうかな。俺には実感がまるで……ここが異世界だから強い力が使えるのかな？」

異なる次元にある世界に来たのだから、そういう事もあるのかもしれない。重力が極端に小さいとか、物質の分子構造が違ふとかだろうか。

あるいは、召喚の際になんらかの特殊な力が付加されたのかもしれない。ゲームや小説ではよくある話だが、後で検証してみた方がよさそうだ。

「……にしても広い城だな。どこになにかあるのか、全然分かんないよ」

「すぐに覚えられますよ。それまでは私がご案内させていただきます」

城内を歩いていくと、やたらと開けた広い場所に出た。集会所かなにかと思いきや、その片隅であば暴れている者が

いた。

「うりゃああ、せやああ！」

巨大な剣を振り回し、叫んでいるのはラムダだった。

彼女の前には、小山のように大きな緑色のゼリー状物体が蠢うごめいていて、身体の一部を触手のように伸ばして振り回している。

城内に出現した怪物と戦っているのだろうか。冷や汗をかいた健史に、ユズカが落ち着いた口調で言う。

「ご安心ください。あれは訓練を行っているだけです」「訓練？」

「はい。相手は訓練用に飼育しているスライムです」  
健史達に気付いたらムダが剣を下ろし、スライムから

離れて声を掛けてくる。

「よう、タケシ。少しはこの生活に慣れたか？」

「ま、まあ、ぼちぼちかな……」

ラムダはいつものボンテージっぽい衣装を着ていて、しつとりと汗をかいていた。シャツが肌に張り付き、ユズカに勝るとも劣らない大きな胸のふくらみがクッキリと浮き出ている。

頬が紅潮していて妙に色っぽく、健史はドキッとしてしまった。

そこでユズカが眉根まゆねを寄せ、ラムダをたしなめるように呟く。

「……ラムダ。タケシ様とお呼びするようになっている

でしょう。失礼よ」

「いいじゃん、別に。変にかしこまってるより付き合いやすいだろ。タケシもそう思うよな?」

「あ、ああ、うん。俺はそれでいいよ」

健史がうなずくとラムダは「だよな?」と言って笑っていたが、ユズカはムツとして不満そうだった。

「ええと、ここは訓練場なのかな? ラムダはここで剣の練習をやってるのか?」

「まあな。毎日の鍛錬は欠かせねえから。訓練用に調教してあるモンスターと戦ってるんだ」

巨大なスライムを指し、ラムダが言う。納得したようにうなずく健史に、ラムダは提案してきた。

「なあ、あたしとちよつと勝負しないか？ あんたの力を  
見てみたいんだ」

「えっ？ いや、俺は……剣なんか使った事ないし」  
「別に剣じゃなくてもいいぜ。そうだな……腕力勝負って  
のはどうだ？」

隅の方にあるテーブルを示してラムダが誘ってくる。  
戸惑う健史に、ユズカが呟く。

「よい機会です。ご自身の力を確認されてみてはいかが  
でしょうか？」

「力を確認……そうだね、やってみるか」

健史としても、自分の力がどの程度のものなのか知って  
おきたい気持ちはあった。ユズカにうなずき、テーブルへ

向かう。

休憩用なのか、テーブルは小型だったが、分厚くて丈夫そうだった。

テーブルを挟んで健史と向き合い、ラムダが前屈みになつて肘を突き、右手を差し出してくる。

「やろうぜ、魔王様。あたしと力比べだ」

「腕相撲か。分かった」

健史もテーブルに肘を突き、ラムダの手を握る。彼女の腕は細いが、よく見ると筋肉が発達しているのが分かった。かなり鍛えてあるようだ。ラムダは魔将軍だというし、大型の剣を振り回していた事から考えても腕力はあるはずだ。

「ユズカ、合図してくれ」

「了解。では……始め」

ラムダが呟き、ユズカの合図で腕相撲開始となった。昨日の敵を相手にした時のような力が出てはまずいと思いい、最初は弱めに、そこから少しずつ力を込めていき、健史はラムダの腕を倒そうとした。

だが、彼女の細腕はビクともしない。健史は本気でやってみたが、やはりだめだった。

「ぬぐぐ……！」

「あれ、こんなもんか？ ほいっ、と」

「!？」

ラムダが腕を倒すと、健史はまるで抵抗できずにパタン

と腕を倒されてしまった。

「えっ、あれ？　ど、どうなってるんだ……？」

これは一体、どういう事なのか。ラムダの力が予想以上に強かったとも考えられるが……首をかしげる健史に、ユズカが言う。

「もしかすると……タケシ様、今度はにつくき敵を相手にするつもりでやってみてください」

「えっ？　ラムダをにくめって事？　そんな……」

「これもお力を確かめるためです。そうですね……この勝負に負けたら私の命はないものとお考えください」

「ユズカの命が……分かった、やってみるよ」

手を組み直し、勝負を再開する。悪役にされてラムダは

不満そうだったが、引き受けてくれた。

「はあ、しゃあねーな。んじゃ……うははは、てめえが負ければユズカをぶっ殺す！　それが嫌なら全力を出してみな！」

意外とラムダはノリノリだった。演技には見えず、本当にユズカの命を奪うつもりのように思えてしまう。

「くっ、そうはさせるか……！」

健史がうなり、右腕に力を入める。するとビクともしなかつたラムダの右腕がググツと外側に傾いていった。

「おおっ？　さっきとはまるで違う手応え……だが、まだだ！　このぐらいじゃあたしは負けねえぞ！」

ラムダも負けじと力を入れ、傾いた状態から持ち直す。

二人は真っ赤な顔で歯を食いしばり、力を振り絞った。頑丈そうなテーブルが軋きしみ、二人の発した熱によつて大気が揺らぐ。

先程とは比べ物にならない力を発揮している健史だが、昨日ほどのものではない。

二人の熱気に当てられて後ずさりそうになりながらユズカはその場に留まり、健史に声援を送った。

「がんばつてください、タケシ様！ 私のためにラムダを倒してください……！」

「お、おい、ユズカ？ 自分だけいい役やりすぎじゃね

えか？」

「……」

「無視するなよ！ くそ、こうなったら意地でも負けねえぞ……！」

ユズカの態度にカチンと来たラムダは、本来の主旨を忘れて本気で勝ちにいった。

力を振り絞り、見掛けよりもはるかに強いその腕力を駆使して健史の腕を倒そうとする。

「ぬおおおお……！」

「くっ……！」

健史はギリギリでぶつにかこらえていた。少しでも気を抜けば負けてしまう。だが、このままこらえきれればなんとか勝てそうだ。

ラムダは健史をジッと見つめ、不意に声を掛けた。

「おい、タケシ」

「な、なんだ……？」

「ほら、これ」

「!?」

空いている方の手を胸元に持っていき、ラムダはその大きなふくらみに被かぶさったシャツの左脇わきに指を引っ掛け、内側に向けてグイッと引いてみせた。

布地にどうにか収まっていた特大のふくらみがユサッと揺れてあらわになり、頂点にある小さな突起が顔を出し、健史の目を奪う。

健史が硬直した瞬間を狙ねらい、ラムダは腕を倒した。

「おりゃあ！」



Fufu ♡

バン、と健史の右腕がテーブルに叩き付けられ、勝負はついた。ラムダの勝利だ。

「ははは、やったあ！　ざまあみろ！　あははは！」  
飛び上がり、腕を振り上げて喜ぶラムダ。健史は右腕を倒された姿勢のまま固まり、たゆんたゆんと弾むラムダの胸を凝視した。

「負けたのになぜか悔しくない……むしろ得したような……」  
「……タケシ様？」

ハツとして傍らに目を向けると、ユズカが冷えきった眼差しで見下ろしていた。

健史は冷や汗をかき、慌てて誤魔化した。

「い、いやあ、強いラムダは。さすがは魔将軍ってや

っ？ ははは……」

「……」

まばたきもせずに健史を見つめ、ユズカは黙っていた。無言の圧力を受け、健史は生きた心地がしなかった。

やがてユズカはため息をつき、淡々と呟いた。

「どうやらタケシ様は感情によって出せる力が変化するようですね。敵だと認識した相手にのみ本来の力が出せるのでしょう」

「な、なるほど、そうなのか。それでラムダが相手だと力が出なかつたんだ」

「上手うまく感情を制御できればよいのですが……色香に惑わされるようでは困りますね」

「……す、すみません」

さり気なく非難され、健史はガツクリとうなだれた。

ラムダがケラケラと笑い、健史の肩を叩いてくる。

「ま、そう気を落とすなつて！ あたしみたいな清楚せいそ

可憐かれんな少女が相手じゃ力が出せなくても仕方ねえよ！

あははは！」

「せ、清楚可憐？ 言語変換の魔法が上手く機能してない

のか？」

「なんだよ、文句あんのか？」

「な、ないけど……その、そろそろ胸を仕舞ってくると

うれしいかな……」

「おっと、忘れてた。もう、早く言えよな。このスケベー！」

丸出しだった左の胸を隠し、ラムダが照れたように笑う。健史はぎこちない笑みを浮かべ、ユズカがにらんでいるのに気付くなり、慌てて顔を伏せた。

\*

大陸の西の果て、沿岸部に位置する小国。それがヘルドミルという国だった。

少し前に魔王を立ててからというものの、ヘルドミルは急激に勢力を拡大していた。近隣の小国を吸収し、一大勢力を築きつつある。

今のところ、他の魔王は攻め込んできていない。来る

べき他の魔王との戦いに備え、周辺諸国を全て従えて兵力の増強を行う計画が進行中であつた。

ヘルドミル本国、魔王の居城であるヘルドミル城の奥深くにて。

闇やみに包まれた謁見えっけんの間に城の重臣達が集まり、密談を行っていた。

「……メガリアに送つた使者が倒されたただと？ 馬鹿ばかな！」

「やつには対剣、対呪たいじゆの鎧よろいを与えた。メガリアの者どもに對抗する術すべはないはずだが」

「未確認だが、メガリアは魔王を立てたという情報もある」「それこそ馬鹿な！ あの国に魔王を名乗れる者などい

ないはず！」

一人が叫び、集まった重臣達がざわめく。

やがて皆を代表するようにして、重臣の一人がボンボンと呟く。

「確かめねばなるまい。事実なら、可能な限り情報を集めなくては……我らが『魔王陛下』のためには」

皆がうなずき、奥にある『玉座』に目を向ける。

そこには、重厚な全身鎧をまとった、彼らの『魔王』が静かに座していた――。

# 普通の高校生が、 ある日突然異世界魔王!?



2018年12月15日ごろ  
全国の書店さままで発売!!

## 魔王バトルロイヤル

魔力ゼロでも最強魔王になれますか?

Presented by KOREYUKI Illustration by ROUKA

第10回GA文庫大賞  
**奨励賞**  
受賞作